鉄などに比べ、難しいとされるアルミニウムの溶接で定評がある。静かな山あいにある和歌山工場が生み出す製品が、全国の空港や大学病院で使われていることはあまり知られていない。

旧清水町（現・有田川町）出身の坂口政一氏が1951年、大阪市内で紡績工場の綿糸などを入れるアルミ製箱を作り始めた。親せきらの要請で67年、町内に和歌山工場を建設。町の誘致工場第1号となった。現在は、2代目の素紹社長(69)が先代の遺志を受け継ぎ、若い技術者を育てている。

坂口素紹社長

和歌山工場の最初の売れ筋製品は投票箱。選挙の「七つ道具」や開票台などを企画・販売する神戸市内のメーカーに卸し、全国で活躍した。自

「坂口製作所」有田川町

Wakayama Economy

アルミ溶接で定評 よそに作れないものを

製作中の新幹線主変換筐体＝有田川町で

データ　資本金1000万円。従業員は本社（営業、設計）7人、和歌山工場78人。軽金属溶接構造協会の「設計・工作について信頼できる」M級工場（全国6社）に認定されている。本社は大阪市西成区千本中2の4の14、電話06・6661・7007。和歌山工場は有田川町清水877の1、電話0737・25・1150。

治体の規模に合わせて2000～1万2000票用の4、5種類を製造。選挙が重なり、1週間で1000個近く作ることもあった。

また、溶接技術を生かして機密性を追求。一定の温度を保ちながら、においが漏れないエアコン付きの実験用動物の飼育箱を製作。踏切などの制御盤を収納する信号用器具箱は、雨による漏電を防ぎ、腐食しないと好評で私鉄からJRへと一気に広がった。

90年、新幹線のモーターを収納する主変換筐（きょうたい）体の製造を依頼されたが、最初に納品した300系車両用6台はすべて返品。制御機器や車体など、複数の業者がそれぞれ担当する共同作業のため、誤差は許されなかった。現在、N700系用を製作中。アルミは溶接で1センチ以上縮む。全長の許容差はプラスマイナス3ミリ、高さは同2ミリ、幅はマイナス3ミリまで。伸び縮みを計算し、図面通りに仕上げるには熟練の技が必要だ。

数こそ少ないが、空港にある化学消防車の貯水タンクと薬液タンク、3連はしご、原子力関連も手がける工場となった。アルミ溶接の全国大会である全国溶接技術競技会で、製缶課の岡本常誉さん(34)は2年連続入賞を果たし、「受賞は先輩のおかげ。もっと技術を磨きたい」と意気込む。梅本忠幸工場長(57)も「アルミ溶接は県内でうちくらい。よそに作れないものを作っていきたい」と話した。【加藤明子】

毎日新聞（和歌山版）
平成20年5月27日